

記事 1 BPSD をどう表現すべきか？家族も納得・安心な適切表現と書き方

福岡シティ福祉サービス

代表 白石 均

目次

はじめに—BPSD を適切に表現する意義とは	2
BPSD の説明を聞く、記録を見る家族の思いとは	3
認知症本人に現れる行動（BPSD）と心理状態の関連性について	3
BPSD の適切な表現、不適切な表現	4
最後に	7

介護保険ができて 16 年、2000 年に介護保険が創設される前は措置制度と言ってどのサービスを利用するかはすべて行政の手にゆだねられてきました。しかし、2000 年以降は全てのサービス利用は契約形式となり利用者および家族の権利意識が芽生え始めました。それに伴い特にここ 5~6 年の間は、利用者家族による訴訟が増加しており、ますますリスクマネジメントが必要不可欠なものとなっています。それに伴い、介護記録との開示のケースが増えてきました。

そこで本稿では特に認知症の周辺症状（BPSD）の介護記録における適切な表現の記載法について解説していきたいと思います。

はじめに—BPSD を適切に表現する意義とは

BPSD を適切に表現する意義とは何でしょうか？

それは一言でいうと利用者家族の方に私たちはこういうサービスを利用者の方に提供していますということを分かっていたくことに尽きます。

また第三者にこういうサービスを行っているということを浸透させるという意味もあります。

ここでは介護記録の役割についてみていきたいと思います。（図 1）

生活者の生活の証と提供者の支援の証を残す

私たちはこういうサービスを提供しているということを唯一の材料になるということです。つまりこの記録がないといくらケアをしても介護をしていないということと同じなのです。

利用者の状態や心理面・生活環境の把握

これらはケアをしていくうえでとても重要なことです。

極端な例を言うと、利用者の日々の様子を記録することにより、当初食事介助を行わないと食べられなかった人が数か月後には QOL が向上し、自力で食べられるといった改善の方向性を示してくれるのです。

万が一の時「介護事故」から自分を守る

つまりリスクマネジメントの観点から非常に大切になってくるということです。繰り返しになりますがここ 5.6 年は訴訟に持ち込まれるケースが増えてきました。

最悪、訴訟に持ち込まれた場合、問われるのは介護記録の内容なのです。この記録内容の如何で事業所の運命が決まると言っても過言ではありません。

利用者家族にサービス提供内容を分かっていたく

利用者の家族の方々はこの施設に入所して（サービスを利用して）どういうサービスを受けているのか、スタッフはどのように接してくれているのだろうかということを知りたいというのが本音ではないでしょうか。その為には、詳細な記録が大切なことはもちろんの事、適切な表現が大切になってくるのです。

以上 4 点は BPSD を適切に表現する意義にも例外ではないのです。

つまり介護記録を残さないということはケアを行っていないということに他ならないのです。

BPSDの説明を聞く、記録を見る家族の思いとは

すべての記録は利用者や家族から開示請求があった場合、これに応じなければならない。ということが個人情報第25条に規定されています。つまり家族がどういうケアを提供してもらっているのかを知りたいときはいつでも記録を開示できるように準備してかなければならないのです

そこで介護記録を利用者家族が見る際どんな気持ちなのでしょう。

- ・スタッフの人たちに大切にされているだろうか、ぞんざいに扱われていないだろうか
- ・施設の方に迷惑をかけていないだろうか。

の2点だと思われます

利用者家族への介護記録を開示するケースは、何かしら施設や事業所に疑いの目が向けられる時がほとんどです。この時に介護記録に「徘徊」「暴力」「介護抵抗」という介護者の主観的な言葉があったら家族の方はどんな気持ちになるのでしょうか。

「やっぱり、ぞんざいな扱いをされているんだ、そんなに迷惑なのか、うちの家族を軽率に扱いやがって」

「うちの家族を上から目線で見ている、そんなにあなたたちは偉いの？」

「うちの人の人格を否定されているようだ」

という怒りの感情が湧くのではないのでしょうか

またそうではないとしても

事業所の事が信用なくなり利用者家族と事業所の信頼関係を構築するのが、困難になってくるのです。(図2)

認知症本人に現れる行動（BPSD）と心理状態の関連性について

ここでは、周辺症状と認知症本人の心理状態の関連性について解説してきたいと思います。

周辺症状の意味しているところは以下の2点に絞れると言えましょう。

周辺症状は本人が人生の後半で残してきた宿題を解決しようとしている行動をあわらしている

課題とはエリクソンが人生の発達段階において解決しなければならないそれぞれの宿題の事です。(図3)

発達段階として幼児期の場合、課題が解決されない場合 BPSD としてどういった行動を示すのかを例としてみてみましょう。

この段階では自律性を得るか得られないか学びます。

《自律性を得られなかった場合》

親が私たちに繰り返し完璧さを求めてきた場合、子供は恐れを抱き、新しいことにチャレンジできなくなります

《その結果見当識障害に現れる BPSD はどういった行動が現れるか》

今迄の出来事に固着し、自分のもっているものにしがみつき、常に未経験の出来事を恐れするようになります。

そして、何とかこの状態から抜け出そうと本なんなりに解決策を探ろうとするのです。

そのような理由から本人にとっては“おふろ”を見当識障害から忘れてしまうことで未知のものと思ってしまい、入りたくない、いやだと言って相手にひっかくなどして何とかその未知の恐れから抜け出そうとして SOS を出すようになるのです。その行動が私たち専門職から見れば BPSD(周辺症状)として映るわけです。

つまり、エリック・エリクソンのライフリスク論を使うと以下のような事例が考えられるのです。

未解決の課題

問題行動（BPSD）

高齢期における喪失体験（肉親との死別）

常に人を探してうろうろ歩き回るようになる【徘徊】

若いころ、戦後の混乱期で十分な育児ができなくてなくなってしまった。【若成人期における孤独】

人形を娘にたとえ、常時持っており、人形に語りかけている。

その他のステージについては図をご参照いただきたいと思います。

BPSD は欲求を満たすために本人なりに相手に分かってもらいたいことを伝える手段である

基本的欲求（ひとつまたは複数）を満たす行動である可能性が BPSD として現れることがあります。（図 4）

例を示します。

BPSD の行動としては布を繰り返し触っています。この行動を意味しているところはなんでしょうか
この欲求を満たすために若いころ、十分な育児ができなかった、子供服を作ってやれなかったので、せめて 1 着だけでも作ってやりたいと思っているのです。

この行動は“誰かの相手の役に立ちたい”という心理的欲求に基づいていると思われます。

BPSD の意味しているところがすべてこの 2 点に絞れるとは言い切れません。例外も沢山あります。

しかし、このことを知っておくだけでも、かなりケアが楽になるのではないのでしょうか。

BPSD の適切な表現、不適切な表現

以上のようなことを踏まえて介護記録においてどのような気を付けたらよいか例を挙げて解説して行きたいと思います。（図 5）

BPSD の表現で気を付けなければならないのが、先ほどにも書きましたが主観的な表現をしてはならないということです。利用者の言動や人格を否定するような表現を絶対に避けなければなりません。

それでは介護記録である事例についてみていきましょう。

①徘徊について

【悪い記載例】

〇〇さんが施設内を徘徊している

この場合、スタッフと利用者との会話、やり取り、利用者から発せられた言葉をそのまま記載してください。

【良い記載例】

〇〇さんが施設内を歩いているので「どうかされましたか」とお聞きしたところ「もう少ししたら、娘が帰ってくるので帰らないと・・・」と言っておられたので・・・

②妄想

【悪い記載例】

部屋に戻ると妄想が出始めたようだ

この場合も職員とのやり取りを記載するようにします。

【良い記載例】

部屋に戻ると「結婚指輪がない！」と言っておられたので一緒に探すことにした。「出てきましたよ」というとホッとされていたが、今後、結婚指輪が〇〇さんにとってどんな物なのかをお聞きするなどして、今まで過ごしてきた生活歴を考慮したうえでスタッフ同士で話・・・

③暴言

【悪い記載例】

その① 食事中、スタッフ〇〇に向かって暴言を吐き始めた

その② お風呂に誘導しようとしたら暴力を振るわれた

この場合も利用者の方から発せられた言葉をそのまま記載するようにします。

【良い記載例】

その① 食事中「バカヤロー、こんなまずいものが食えるか！」と言われた

その② お風呂に誘導しようとして腕を軽くつかんだら「今は入りたくない」といって押し返された

④興奮

【悪い記載例】

居室に行くと〇〇さんが興奮しているようだ

この場合も、利用者とスタッフとの会話のやり取りを記録するようにします。

【良い記載例】

「早く誰か来てー」と〇〇さんが言うので急いで△△が居室に駆けつける。
「どうされましたか？」とお聞きすると「そこに誰か男の人がいるの。私怖くて・・・どうしたらいいかわからなくて、しばらくここに一緒にいて」とおっしゃるので「大丈夫ですよ。私がいますから安心してくださいね」と・・・

⑤【帰宅願望】

【悪い記載例】

〇〇さんは決まってこの時間になると「家に帰る」と帰宅願望が出るようだ。

この場合も本人から発せられた言葉と職員とのやり取りを記載するようにします。

【良い記載例】

「家に帰る」とおっしゃるので「家に誰かおられるのですか？」とお聞きすると「娘が帰ってくるから。私が帰って夕食を作ってやらないと」と言われるので・・・

⑥入浴拒否

【良い記載例】

なかなか入浴してくれないという入浴拒否が見られる

この場合も、入浴介助に入るまでの利用者とスタッフとの会話、また利用者の様子を記載するようにします。

【良い記載例】

「お風呂が沸きましたよ」と浴室にお連れし、体を洗うのを手伝おうとすると突然入浴は嫌だと言われた。「どうされましたか」と聞くと「いつもの△△さんがしてくれるのに、今日はどうしてあんたなの？いつもの〇〇さんにしてちょうだい」とおっしゃるので事情を話すと納得してくれたようで・・・

⑦暴力

【悪い記載例】

日中、利用者の〇〇さんといざこざが起こり、〇〇さんが△△さんに暴力をふるいそうになっていた

この場合も二人のやり取りの様子、2人から発せられた言葉を記載するようにします

【良い記載例】

日中デイルームで過ごしていると、何やら利用者同士の声がするので駆け寄ってみると〇〇さんが「いつもボケてるお前なんかには渡すもんか、おとなしく部屋に戻っけ！」と言い、△△さんの胸ぐらをつかんでいた。介護スタッフの××が「どうされましたか」と聞いたところ・・・

いかがでしたでしょうか。介護現場でありそうな記録例を挙げてみました。

このように BPSD を介護記録に表現するには、利用者本人から発せられた言葉、そして介護スタッフとのやり取りを記載すればよいのです。そうすることで、介護記録の開示の際利用者家族が見ても事実の把握ができますし、介護スタッフとのやり取りで気遣いの会話が書かれていたら、「大切に扱われているんだ」と思われ、今後の信頼関係が良好なものになるのです。

先に申し上げましたが周辺症状というのは、利用者が思っている事、こうしてほしい、あ～あしてほしいという事を満たすために本人なりに解決している姿なのだという事を認識していただけたら、おのずと記録の書き方も変わるのではないのでしょうか。そう認識することで介護拒否とか暴言とかいわゆる“上から目線”的な言葉が無くなってくるような気がします。

ここで介護記録をする上で注意することがあります。

私たちに映る BPSD の行動には当事者なりの思いが秘めていますので、その行動に至った原因を私たち介護職が分かるようにしていこうと姿勢（今後の対応）を最後に記載することが大切です。

例えばこういった場合です。

利用してまだ日が浅い鈴木さんが、朝から施設内を行き来している為、聞いてみると、「家に帰りたい」と言っていた。しかしながら朝食の準備に関心を示し、鈴木さんがその場を離れ、訴えを中断したため、特段の対応はしなかった

今回の出来事を、カンファレンスを開催し、鈴木さんに対し、“異変”（不安げに歩き回る、「家に帰りたい」と訴える等）がなぜ、決まった時間に起こるのか、今までの生活歴を含めて、観察していき、そうなるにいたった鈴木さんの心理状態を知る必要がある。

この例では家に帰りたいと訴えている鈴木さんに対して対応策としてカンファレンスを開催して心理状態を探っていくという事が書かれています。このように **PBSD** に対して今後の方向性を記載するのです。

今回は、**BPSD** の表現の仕方について投稿してきましたが、いかがでしたでしょうか。もちろんこれらが全てではありませんが、最低限これだけは守っていただきたい内容です。

最後に

さて、最後に実地指導対策として介護記録として注意する点をまとめておきたいと思います。

・ケアプランに記載された内容に基づいて記録を行う事 (図 6)

ケアプランに記載されている目標と大きくかけ離れていないかを確認することが重要です。

例えばケアプランの目標にレクリエーションの参加について書かれていたとします。

この場合、どういうことを介護記録として記載したらよいでしょうか。

①利用者の日常生活の様子はどうであるか

②どんなレクリエーションに興味を持っているのか

③レクリエーションに参加時の利用者と職員はどのような会話を交わしたか

等を記載するようにします。

実際の実地指導ではケアプランの内容と介護記録記載内容に矛盾点がないか、ここを重点的に調べられます。

くれぐれも注意してください。

・記載漏れについて

よく介護記録というと、記録本文を記載することにだけ集中しがちですが、・月日、時刻、サイン [記録者氏名] などを案外忘れがちです。これらの基本事項については、利用者の様子を記載する前に必ず、入れておきましょう。案外、この箇所を指摘されることが多いものです。

・訂正方法について

これは、当然と言えば当然ですが、修正テープ・修正液で消すことはもってのほかです。介護記録は公文書と言っても過言ではありません。もし、このような方法で修正していることが指導で見つかったら・・・何か怪しいことがあるのかと疑われても仕方ありません。

・事実を書くこと

よく、介護記録で見かけるのが、「〇〇と思われる」とか「△△のようだ」と推測してしまう事です。(図 7)

根拠もないのにこのように一方的に推測で決めつけるのはよくありません。もし、このような記載をするなら「実際に××であった。それから推測して〇〇と思われる」と推測に至った根拠を示すことが重要です。

・日記にならないこと

私も新人の頃、記録の仕方が分からなくて介護記録が日記帳になってしまった経験があります。

ただ単に「今日は体調がすぐれない様子でいつも日課とされている〇〇をされなかった」だけでは事実のみしか記載されていません。これでは日記で介護の専門職が書いたものとは程遠いものになってしまいます。

〇〇されなかったからどうしたのか、誰かに報告したのか、今後話し合っ解決策を探っていくのかという今後につながる記録を残すことが重要です。

今迄述べてきた **BPSD** の適切な表現のまとめとして記載例を図 8 に示します。

今迄のまとめとしてポイントは以下の通りとなります。

- ・利用者から発せられた言葉を記載する
- ・主観的な言葉「暴言、介護拒否、入浴拒否等」の記載は言語道断！
- ・常に BPSD が利用者の心理状態から起こっているのだという視点から記載すること
- ・場合によっては今後の解決策に結び付ける記載を心がけること

これから認知症の利用者は増えていきます。また家族の権利意識が増えてきたこともあり益々、介護記録の開示するケースが増えてきます。

このことは何を意味するのでしょうか。

一言でいうと私たちの身を守る手段がますます重要視されてきたことなのです。

これらは、介護記録の仕方をマスターしておくことが重要になってくると同時に、この介護記録が私たち専門職の身を守る唯一の証拠になるのです。逆に言うと適切な記録表現をマスターしなければ、適切なケアを提供していないとみなされ、訴訟に持ち込まれた場合、莫大な損害賠償を課されることも最悪ありうるということを肝に銘じておかなければなりません。

医療の分野では既に訴訟のオンパレードと言われています。

私の義母が入院するとき、入院承諾書等様々な書類にサインさせられたのを覚えています。

担当の方がおっしゃっていました。「今医療の世界ではちょっとしたことで訴訟に持ち込まれるケースが多いんです。いわゆるクレーマーと言われる人たちから訴えられるのです。そのクレーマーから我々の身を守るためにこのように同意書等にサインをお願いしているのです」と。

福祉の世界でももうすでに同様の事が起こってきているような気がします。

私たちにとっては、介護記録がとても重要な意味をなすのだという事を常に認識において職務を遂行していただきたいものです。

参考文献

【福岡シティ福祉サービス】介護スキルアップセミナー「介護記録の書き方」 P1,16,18

【福岡シティ福祉サービス】介護スキルアップセミナー「バリデーション」

【福岡シティ福祉サービス】介護スキルアップセミナー「バリデーション」 参考資料

【福岡社会福祉士会】バリデーション研修資料

【介護労働安定センター】介護労働安定センター「バリデーション」研修資料

図 1 介護記録の役割

記録の役割

- ・生活者の生活の証と提供者の支援の証を残す
- ・利用者の状態や心理面・生活環境の把握
- ・ケアの連続性を可能にする



利用者の生活を点ではなく面でとらえる



ケアの前後で記録から何が問題なのか、何が起きているのかをつかむことができる

- ・ケアの内容を明確にしてチームで共有する



チーム全体のスキルを高めサービスの質の均一化

記録の標準化が重要
同一組織において記録の
ルールを定める。

- ・万が一の時「介護事故」から自分を守る

「ヒヤリパット」「事故報告書」などの記録がなければ、利用者に対し損害賠償を求められることがある
適正なケアをしていたにもかかわらず、それを証明するものがなければ第三者から正当性は認められない

- ・支援の結果を社会に発信する

社会に対し情報公開やより効果的なPR活動を行う。どういう支援を行っているのかを明らかにしなければならない



記録を残すこと

利用者・家族の信頼関係を築く

記録を残していない



ケアをしている

図 2 記録開示と信頼関係

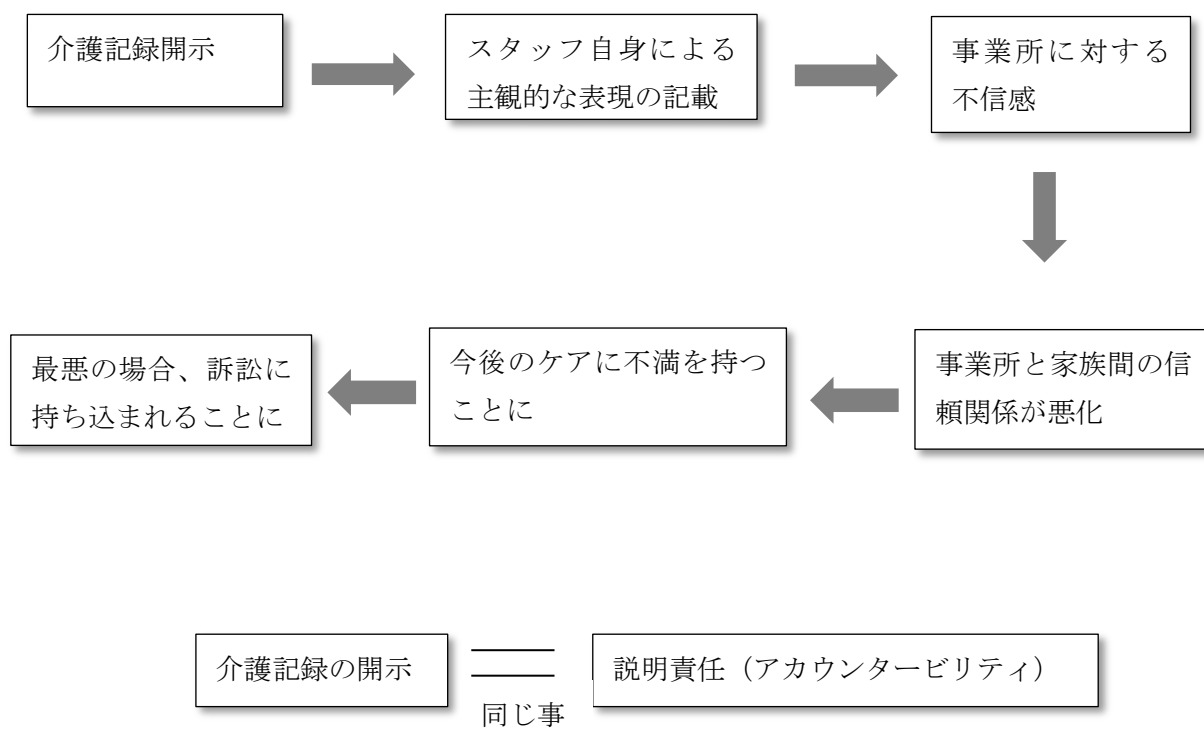


図3 エリクソン生涯発達理論と見当識障害の関係

期	人生における解決すべき課題	未解決な課題	⇒	認知症高齢者に見られる振る舞い
乳児期	基本的な信頼 VS 基本的な不信	基本的な不信	⇒	・ 非難、絶望的、無力、無益 ・ 新しいことをすべて恐れ、感情を飲み込む
幼児期	自律性 VS 恥、疑い	恥、疑い	⇒	・ 良い子のように NO と言わない ・ リスクを恐れる ・ 自己不信 ・ コントロールを失うことを恐れる
遊戯期	主導権 VS 罪悪感	罪悪感	⇒	・ 新しいことに挑戦しない ・ 憂鬱、罪悪感 ・ いつも泣いて苦しんでいる
学齢期	勤勉性 VS 劣等感	劣等感	⇒	・ 「私はだめな人間だと思ってしまう」 ・ 憂鬱になる
思春期	アイデンティティ（同一性）VS アイデンティティの混乱	アイデンティティの混乱	⇒	・ 男の人がベットの下のいる ・ 他の人の名前を言う
若青年期	親密 VS 孤立	孤立	⇒	・ 自分の殻に閉じこもり、人を遠ざける ・ 依存する
青年期	生殖性（生み出す）VS 沈滞（停滞）	沈滞（停滞）	⇒	・ 年を取ること、古い考え方、社会的立場に 執着する ・ 年を取ること失う言雄を否定する
老年期	成熟（統合）VS 絶望、嫌悪	絶望、嫌悪	⇒	・ 憂鬱、周りの世界に対する嫌悪 ・ 失敗を人のせいにする ・ 私は「だめな人間」だという

◆高齢者が経験してきたもの

- ・ 人生の課題や失望に向き合ってきた
- ・ 希望をもって日々の生活の問題に取り組んできた
- ・ 自分自身や他人の間違いや失敗を許してきた
- ・ 目標を達成できないときは妥協をしてきた
- ・ 失敗やミスをしたり、夢がかなえられなくても自尊心をもち続けてきた
- ・ 身体的喪失や社会的喪失を乗り越えてきた
- ・ 体の衰え、愛する人の死、避けることのできない死を受け入れてきた
- ・ 生きるための情熱をもち続けている
- ・ 過去をくよくよ思いわずらわず、思い出として楽しんでいる
- ・ 新しい人間関係をつくる
- ・ 愛する人と和解し、死に備えてきた

◆マズローの段階的欲求と見当識障害

マズローの欲求段階説	見当識障害のある高齢者に当てはめた場合
自己実現欲求 (自己のすべての可能性を実現する)	・ 安らかな死を迎えるため、まだやり終えていないことを解決する欲求 ・ 安心して暮らす欲求
美的欲求 (均整美、秩序、美)	・ 視力、聴力、身体的自由、記憶力が低下しても、平静な気持ちを回復する欲求
認識欲求 (理解、探究)	・ 忍び難い現実を納得のいくものにしたい欲求 ・ 整然と、調和している気持ちになれる、なじみある人間関係があり、くつろげる場所を見つけたい欲求
尊重欲求 (達成、承認してもらう、他者から認められること)	・ 承認、地位、自分らしさ、自尊心への欲求 ・ 役に立ちたい欲求 ・ 傾聴され、尊重されたい欲求
所属、愛情の欲求 (他者と交流する)	・ 愛され、所属したい欲求 ・ 人と接したい欲求 ・ 感情を表現したい欲求、その感情を受け止めてもらいたい欲求
安全欲求 (安心、安全と感じられること)	・ 動かなくされたり、拘束されたりすることなく、育まれ、安心したい欲求 ・ 痛みや不快感を軽減する欲求
生理的欲求 (飢え、のどの渇き、性等)	・ 触覚、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、性的表出等、感覚を刺激する欲求

ナオミ・フェイル バルデーション・ブレイクスルーより

人生の後半で見当識を失った人は、以下のようなある特定の精神・心理的、そして社会的欲求をもっている

- ・安らかな死を迎えるために未解決な問題を解決したい欲求
- ・平和に暮らす欲求
- ・視力や聴力、身体的自由、記憶力が低下しても平静な気持ちを回復する欲求
- ・忍び難い現実を納得のいくものにしたい。整然と、調和している気持ちになれる、なじみある人間関係があり、くつろげる場所を見つけない欲求
- ・認めてもらいたい欲求。地位、自分らしさ、自尊心への欲求
- ・役に立ちたい欲求
- ・聞いてもらいたい、尊重されたい欲求
- ・感情を表現したい欲求、その感情を受け止めてもらいたい欲求
- ・愛され、所属したい欲求。人と接したい欲求
- ・動かなくされたり、拘束されたりすることなく、育まれ、安心したい欲求
- ・触覚、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、性的表現等、感覚を刺激する欲求
- ・痛みや不快感を軽減する欲求

これらの欲求を満たすために、

- ・彼らは心の目を使ってものを見る。そうして過去のなつかしい声を聞く。
- ・働いていたとき役に立っていると感じた気持ちを再びよみがえらせようと、働いていたときと同じように手や足を動かす。
- ・言葉で意思疎通をすることができなくなると、言葉にならない音を混ぜ合わせて感情を表現する。

見当識障害のコミュニケーションの上で理解しなければいけないこと

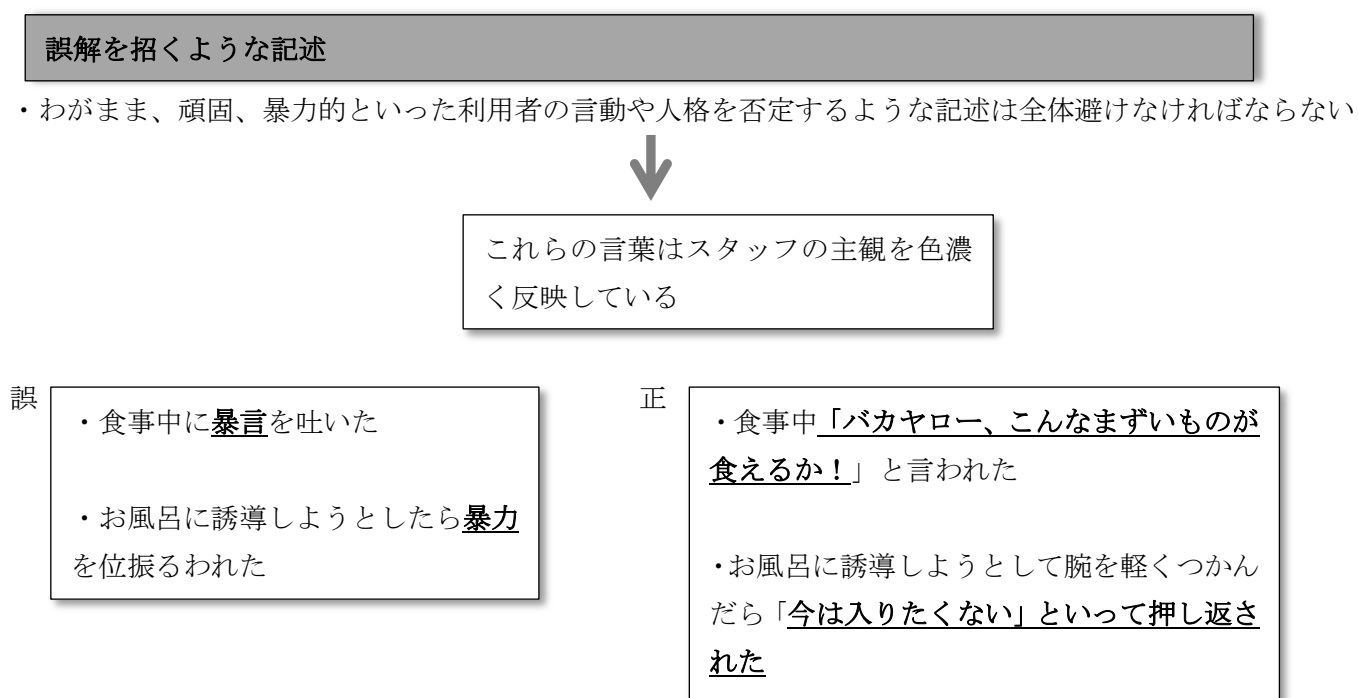


- ・たとえ見当識障害があっても、普遍的な欲求をもち続けている事。
- ・自分が属する世界をもち、自分らしさを見つけ、自分の感情を表現したいという欲求をもち続けている事。

後期高齢者は、孤立した状態で、解決の激しい痛みを乗り越えようと苦しむ。

理解できない行動にどう対処していいのか途方にくれている介護者や家族には挫折や苦痛の元となる。

図 5 BPSD の表現について



BPSD について

「介護抵抗」という記録

第三者に伝わらない

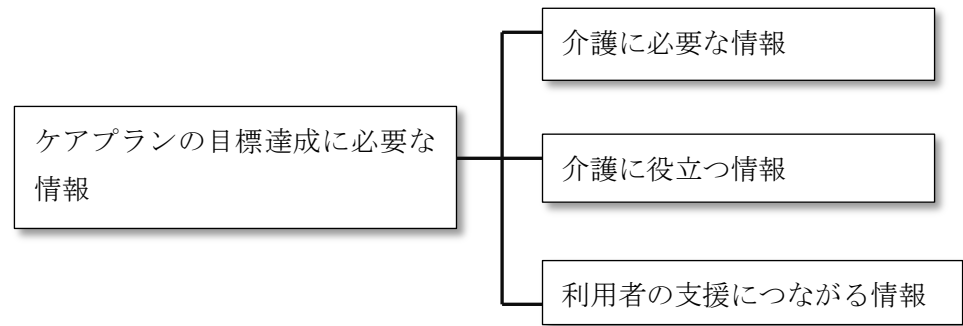
介護抵抗という言葉は、ネグレストと思われても仕方ない。

A さんがお風呂に入ってくれなく、入浴拒否され、**介護抵抗**された。

それに対するアプローチ法が記載されているか

図 6 ケアプランの目標と介護記録の関係

全ての介護記録はケアマネから提出されたケアプランの目標に沿った記録をしなければならない。



事例

ケアマネから提出されたケアプラン

長期目標
施設内を転倒なく確実に一人で歩行することができる。

短期目標
歩行訓練を繰り返し、1日3分は手すりにつかまりながら、歩くことができる。

ケアプランを
反映



介護現場での介護記録

書くべき情報
①利用者の日常生活の歩行の様子はどうであったか
②歩行訓練時の様子や効果はどうであったか
③職員が歩行介助したのはどんな状況の時で、どのような介助をし、その時の利用者の反応(表現、言動)はどうであったか
④職員がどんな声掛けをし、どんな会話を交わしたか
⑤職員が気づいたこと

長期目標
楽しみをもって生活できるようにする

短期目標
・レクリエーションに参加し、楽しみを見つけられるようにする。
・他の利用者と雑談できるようにする。

ケアプランを
反映



書くべき情報
①利用者の日常生活の様子はどうであるか
②どんなレクリエーションに興味を持っているのか
③レクリエーションに参加時の利用者と職員はどのような会話を交わしたか
④他の生活場面で利用者が楽しみをもっていることは何か
⑤職員が気づいたこと

図 7 推測による介護記録例

断定的に描くことを避けなければならない「～である」

「～と思われる」「～と考えられる」などの推測であることがわかるような表現にする

悪い介護記録の例

① 「熱があるようだ」「痛みがあるようだ」などの推測を交えた記録



ネグレスト（介護放棄）とも取れる

熱があるから痛みがあるからどう対処した
のかを記録に残すことが大切

・推測した根拠がわかるようにする

たとえば利用者が『生きる気力を失っている』と感じたのであればなぜそういえるのかをその時の会話、利用者の発した言葉、エピソードなどを書いてそう推測した根拠を示す

誤

家族や友人の訪問も少なくなり、生きる気力を失っている

正

家族や友人の訪問も少なくなり、時折『だれも相手してくれない。生きててもしょうがない』とつぶやくことがあり、生きる気力を失っているように思われる

図 8 BPSD における介護記録例

ポイント

- ・利用者から発せられた言葉を記載する
- ・主観的な言葉「暴言、介護拒否、入浴拒否等」の記載は言語道断！
- ・常に BPSD が利用者の心理状態から起こっているのだという視点から記載すること
- ・場合によっては今後の解決策に結び付ける記載を心がけること

①入浴の場面にて【介護拒否】

入浴介助の最中、〇〇さんがスタッフ××の手を引っかき始めた。突然の事でびっくりした。今回はいつものスタッフがたまたま休みだったので代替りの××が介助に入ったのだが。そこで「何か気に障ることがありましたか」と聞くと体を指して何か訴えかけている。「今日は△△が休みなんですよ。だから私が担当させていただきますね」と言うと落ち着いた様子で入浴されていた。

このような状況を踏まえ今後は、〇〇さんの入浴介助に入る際、いつもと違うスタッフが担当するときは、必ず事前にその旨を〇〇さんに伝えることを徹底することを朝のミーティングで伝達・確認することにする。

スタッフ××と〇〇さんのやり取り、
〇〇さんから発せられた言葉を記載

今後の解決策の記載

②居室にて【物盗まれ妄想】

AM3:00 過ぎ、「誰か来て～」と〇〇さんからの悲鳴。急いで居室に何うと「ここにおいていた指輪がないの」と言われ、パニックを起こされていた。スタッフ××が「どこにおいてたのですか」と聞くと「ここにおいてたの、大切な指輪なの、主人がくれたものなのよ」と言われる。××が「大丈夫ですよ。ご安心ください。私が探しておきますから・・・探し当てたらすぐ連絡しますね、もう遅いからゆっくり眠られてください」というと「じゃ、お願いね」と言って床に就かれた。

2 日に 1 回はこのような事が繰り返し起こる。そこで〇〇さんの生活歴から〇〇さんにとって指輪がどんな意味があるのか、私たちに何を訴えているのかをカンファレンスを開いて検討する必要がある。

スタッフ××と〇〇さんのやり取り
〇〇さんから発せられた言葉を記載

繰り返される言動に対して〇〇さんがどう
いう心理状態から起こるのかに視点
を置き今後の解決策を記載